

新地域ビジョン策定に係る関係団体アンケート結果

- Q 1 : 地域の魅力や誇り、地域資源、西播磨に暮らしてよかったと思うこと …… 2
- Q 2 : 地域への問題意識や課題 …………… 5
- Q 3 : 地域課題等に関する現在の潮流や 20 年前と比べた地域を取り巻く環境変化… 9
- Q 4 : 地域の将来像（地域の将来への思いや目指すべき姿） …………… 1 3
- Q 5 : 地域の将来像（ポストコロナ、自動運転、ドローンでの配達、テレワーク等、
テクノロジーの進歩等を踏まえた地域の将来像） …………… 1 6
- Q 6 : 地域の目指すべき方向性 …………… 1 8
- Q 7 : 将来に繋がるポジティブな動きやトピックス、取組例 …………… 2 1

Q1：地域の魅力や誇り、地域資源、西播磨に暮らしてよかったと思うこと

- ・子や孫に恵まれた自然を守ってもらいたい。
- ・赤穂市の魅力は、「赤穂義士祭り」「有年地区の縄文式、弥生式の遺跡・赤穂市立考古館」
- ・有年地区は赤穂市の北の玄関口として国道、JR山陽本線により、岡山県、上郡町、相生市等からの人の動きも年々増えている。緑豊かな自然環境の中で、小鳥の囀り、「彼岸花」の群生、清流千種川のせせらぎの音などを感じながら生活できる。
- ・自然の大切さを将来の子どもたちに残せるようにしていく。
- ・三方山で囲まれた自然災害の少ない、瀬戸内海を望む素晴らしい環境。気候が良く災害が少なく住みやすい地域。
- ・水が豊富、自然に恵まれ、学校、幼稚園、保育所、店舗が近くにあり、不便を感じない。子どもが遊べる公園も多くあり、恵まれている。
- ・宍粟市、千年藤、もみじ山、音水湖、スキー場等四季を通じて自然を生かした観光資源が豊富。
- ・住民が思うほど国道、JR等の都市部へのアクセスは悪くない。
- ・人情味温かい地域、桜並木、四季折々の自然が満喫できる地域。
- ・城下町である歴史古い町並み、しょうゆ蔵等がある。
- ・うまい空気、静けさ、小鳥の声、きれいな星空
- ・田舎散歩、農業体験を通して地域のひとの優しさや共助生活に触れ、生きることの幸せを感じる。人生の楽園があちこちにある。
- ・四季に応じた多数の体験プログラムで楽しく過ごすことができ、人生を豊かに出来る。
- ・水と緑が豊かで自然豊かな田舎、農業・園芸においても、いろいろな野菜・果樹の栽培に挑戦でき、食生活を楽しめる環境。
- ・人が温かく（人情味のある）自然災害の少ない地域。
- ・歴史資産（赤松円心、大鳥圭介）と呼べる環境。
- ・都市の様な大きな病院、色々な店舗、遊興施設等ないものも多く、不便な面も多い。
- ・国指定史跡利神城をはじめ山城、歴史の宝庫。
- ・文化は播磨風土記の記載があるように、出雲、因幡、美作、播磨の文化の坩堝。
- ・地域資源と、地政学的位置を活用した町おこしにより、Iターン、Uターン、移住者、交流人口を増やして、次代に繋がる地域の活性化を図る。
- ・犯罪のない安全安心な地域。
- ・高齢者スポーツグループでの週2回程度の交流活動が、高齢者の生きがいとなっている。
- ・行政が（佐用町）細かなところまで支援する。
- ・限られた自然環境ではあるが、四季の移り変わりを感じることができる環境。
- ・誰一人取り残さない地域づくり。
- ・伝統行事の継承。
- ・自然豊かで、歴史的、文化的な魅力が多く存在しているところ。
- ・子どもが安全に安心して暮らせる環境（食、犯罪のなさ、地域の見守り等）
- ・各教育機関の児童、生徒の笑顔、頑張りが、地元の元気をもたらす。それぞれの舞台上で活躍する、児童、生徒にスポットライトが当たるような施策はないものか。
- ・風土、気候が暮らすのに適度であり、雇用もあった。
- ・地域資源は人である。地域コミュニティの繋がりの深さがある。
- ・時間の流れも速くもなく、ゆっくりすぎることもない。
- ・豊富な観光資源。
- ・災害の少ない地域、広大な土地ときれいな川をIT農業に利用した。

- ・地価も安価、移住しやすい地域。阪神間、岡山への通勤可能圏内。
- ・人と自然にやさしい地域
- ・人があたたかく、自然災害が少ない地域
- ・海産物、農産物の流通で、自然豊かな場所だと思う。交通機関（JR）で遠方への移動に便利である。
- ・水と緑が豊富であって自然に恵まれているが、地域の人考え方が嫌なところがある。
- ・水と緑が豊富であって自然に恵まれているほどよい田舎。
- ・水と緑が豊かで、特産物やアウトドアで自然を感じる瞬間が多い。
- ・中途半端な都会であり、田舎であることで、両方経験できることに感謝。
- ・自然災害の少ないエリア。
- ・日本のほぼ真ん中に位置し、出かけるのも楽し、ほどほどの田舎で、人とのつながりがあり、災害が少ない良いところ。
- ・水と緑豊かで自然に恵まれ、温暖で住みやすい気候、災害が少ない地域、
- ・市内中心から遠くないところに恵まれた自然（海、山、田園）があること、近隣市町に就業先があること。
- ・災害が少ない地域であること（気候・人柄が穏やか）
- ・道路・交通が整備されていること。
- ・JR30分毎を20分、15分毎で運転いただければ、相生、赤穂、上郡（網干以西）定住促進への原動力となるのではないか。
- ・豊かな自然と歴史的にも魅力溢れる観光資源がある。
- ・水と緑が豊富にあって自然に恵まれているほど良い田舎。
- ・人が温かく、安心して暮らせる地域である。
- ・自然環境、歴史伝統、海産物、また気候も温暖で住みやすく、自然災害が少ない。
- ・都会ほどではないが、温暖な気候で、衣食住や医療への不便さは少なく、住むには良い環境である。
- ・移住者に対して優しい街である。上質な河川があり、自然が豊かである。
- ・自然に恵まれた環境、比較的自然災害が少ない地域。
- ・西播磨は比較的自然災害が少なく安全
- ・太子町は、田舎であるが、利便性の高い田舎だと思う。コロナ禍でもあり、これからは、都会ではなくそういうところに住みたい人が多くなると思う。
- ・上郡町は、都会に近い田舎街で、交通のアクセスに恵まれた地域であり、山、川と言った自然環境の良いところ。スローライフには最適の町。それを活かした子どもたちの暮らしによりよいところだと思っている。
- ・自然豊かな環境と穏やかな温かみのある人柄にあふれる町だと思うが、自然豊かと言いつつも懸念することは、里山的な場所が少なくなり、鬱蒼とした森となり、人を寄せ付けない自然となりつつある。河川も災害対策として必要なことではあるが河川改修により自然の流れを失った。シラサギ・鶺鴒の繁殖放置により年々増加する一方である。
- ・西播磨地域は、都市部と田舎との中間部で一番個性を出せない地域、利便性があることで通過地点となっているため「普通」なので攻め込んでいく矢を持ってない。
- ・自然豊かな人情味あふれる地域。
- ・海、山、川など自然豊かであり、災害や犯罪の少ないところである。
- ・山、海の自然の魅力があり、欠けているものは見当たらない。
- ・新幹線、国道、高速道路など、交通の利便性。
- ・自然災害があまりない。
- ・ペーロン祭りや地域の伝統文化がある。
- ・豊かな自然と、身近に農業に触れることができる環境。

- 自然豊富なこと。
- 瀬戸内は、比較的自然災害が少なく、風光明媚な魅力ある地域資源が豊富で、特に、子育て支援策の充実に努めている。
- 歴史的価値のある建造物、街並みが継承され、現代に受け継がれてきている室津という町。人口の減少はあるが、近所とのつながり、地域の密着度は他より強いと感じられる。
- 海の環境は、貧栄養化等が叫ばれているが、マガキ等の二枚貝をはじめとした養殖漁業が盛んとなり、漁場としても一級河川に挟まれた海域環境があげられる。
- 全国的に災害が起きている点で、比較的安全な場所であると思われる。
- 相生市に限れば、気候温暖、大雨も台風も来ない。川の氾濫もない。人口も密集していないので、住みやすい町だと思う。
- 「気候が温暖で暮らし良い」と「人柄良し」半面、様々なことに問題意識が希薄な気がする。
- 水と緑が豊富にあって自然に恵まれているほどよい田舎

Q2：地域への問題意識や課題

- ・「安心・安全なまち尾崎」を目指しているが、他地域と同じように高齢化率の上昇に合わせ、空き家・空地が目立ち始めている。
- ・少子高齢化が進み、地域に活気がなくなってきた。店、病院もなく、買い物等は遠方に出向かないといけない、不便で、居住のメリットは少ない。
- ・高齢化が進んでいる中、次の時代の後輩の方の地域への理解度の低下で自治会組織の運営が徐々に難しくなっている。
- ・過疎化、高齢化、少子化の進行
- ・高齢者世帯、一人世帯と若い世代の地域参加がない。
- ・高齢化による地域活動、コミュニティーの存続が難しい。
- ・地域の行事、福祉活動は一部の役員のみで、多くの人は無関心。
- ・過疎化、少子高齢化が進み、地域行事等の実施が困難な地域がある。
- ・国道179号線、幹線道路沿いを中心とする中心地では、市街化区域ということもあり、若年層の流入が見られる。しかし、町域の南北の地域では、高齢化・若年層の流出が顕著。同一町内でも地域によってギャップが出てきている。
- ・少子高齢化、人口減少の問題。高齢者世帯、一人暮らし世帯の増加
- ・子供がいる若年層世帯と地域とが関わる機会の減少
- ・福祉活動、地域行事への若年層の不参加
- ・近隣同士の会話の不足
- ・林業資源の利用度減退による山林の荒廃のため、獣害被害の増大
- ・龍野地域、過疎化、高齢化が進行
- ・若い人たちの社会活動（婦人会活動）に対する無関心
- ・若年層の減少
- ・まちづくりの対しての興味の薄れ
- ・少子高齢化、高齢独居や高齢夫婦世帯の割合が大きい。若年層の都市部、市南部への流出、過疎化。小学校、幼稚園の廃校、JA店舗の撤退、集落センターの廃止により、地域から公共施設等がなくなり、活気がなくなりつつある。
- ・交通の不便さ。医療機関までの遠さ。コミュニケーション機会の場の減少
- ・空き家問題、買い物難民化、農林業の担い手不足、田畑の荒廃化
- ・人口流出、未婚者の増加による人口減少
- ・農地、山林の赤字経営
- ・大資本メーカーによる流行づくり、商品宣伝、価値観の偏向
- ・日本人の伝統文化と共に生きることの価値の喪失
- ・過疎化、高齢化の進行。担い手不足等から、限界集落化が進み、消滅集落の出現を危惧している。
- ・若者や子供の減少による地域の弱体化をいかに克服していくか
- ・若者や地域を離れ残るのは年寄りばかり、福祉の強化
- ・耕作放棄地の増加（草刈りをする人がいない）
- ・少子高齢化が進み子どもの数の激減、超高齢化社会への進展
- ・地域づくり協議会等各種団体の高齢化、若年層の地域のかかわり不足・地域課題の共有化ができていない。
- ・人口が急激に減少し、少子・高齢化が進んでいる、県下ワーストワン、自治体存亡の危機状態
- ・若手の担い手の確保が困難
- ・学校がなくなり、子どもが地域と係る機会が減少
- ・地域がコンパクトシティー化し町内周辺地域からの移入が増え、新旧住民の融和、交

流、親睦を図ることが困難。地域が大きく（23自治会4,500人）、農村地域、商業、官公庁地域・住宅地域、各地区での問題意識が大きく違う

- ・自治会により、過疎化が進み、自治会運営、伝統行事の継承が困難
- ・高齢化が進み、若者が地元就職する場がなく、多くの若者が、京阪神へ出ていく
- ・地域づくり協議会に若者・女性の参加が少ない。各種団体も高齢者しか参加が出来ず、企業等が全くないので、限られた役員構成となっている。仕事していない中高年が主となっている。
- ・高齢者一人暮らし、高齢者のみの家庭が増加し、買い物やゴミ出し等の地域の取組等に参加できにくい状況になっている。
- ・若年層が都市部へ流出し高齢化が進み空き家が増えている。
- ・子供の減少と高齢化で住民と住民交流の機会が少なくなっている。
- ・過疎化の進展、若年層の人口減少と都市部への流出により、協議会の担い手の確保が困難
- ・人口減、過疎化への進行、地元に残らない。
- ・高齢化が進む中、市内を走るバスのルートや時刻が不便で公共交通機関が利用できない。
- ・近隣の情報共有が難しくなっている。
- ・高齢化の進行、出生率の低下。
- ・買い物困難者問題。
- ・市内の子ども会が自治会に所属。子ども会解散予定。
- ・少子化に伴う、児童数の減少により子供会が活動できない状態。担い手不足
- ・若年層の人口減少、結婚後の地元定着が少なくなり、更なる子どもの数の減少に繋がっている。
- ・子供の地域へのかかわりは比較的多い方だと感じているが、地域行事は高齢者が中心、子どもの親世代（20後半～40代）が仕事の部分もありが、地域の担い手の中心ではなく、世代交代ができるのか、地域行事が引き継げるのか、不安である。
- ・少子化による児童生徒の急激な減少や若年層のボランティア指導者の確保が難しくなっており、健全な青少年の育成活動が停滞傾向になってきている。
- ・少子高齢化による、若年層の人口減少により、地域全体の活気が低下、経済活動も低下している。構成委員も高齢化しているが、若手の担い手が不足している。
- ・少子化が進み、児童・生徒の減少に伴う高等学校のクラス減により、教育現場に新たな問題が発生している。（学級減になると、教員の数を3年間で過員解消しなければならない。現場の弊害は大きな課題として山積みする。例えば、部活動顧問の担当者が複数部の部を兼任という現象。業務過多になる。）
- ・生徒の通学路における街灯の設置（夕暮れ時、暗くなつての下校時、安全、安心という観点で懸念）
- ・文化団体に加入する会員の減少と高齢化
- ・地域の中で世話活動をする人がなく団体が解散している。
- ・在留外国人の方々との交流事業、居場所づくり、日本語学校支援などを推進しているが支援ボランティアが増加しない。特に定年退職年代が少ない。
- ・在住外国人の方々と地域での交流機会が増加しない。何年も住んでいるが、地域にとけこめなく、孤立している場合もある。特に学校における児童は欠席や学習の遅れが目立つ子もいる。
- ・人口減少、少子高齢化、様々な組織の後継者不足、地域のつながりの希薄化（コミュニケーションがとりにくい）
- ・地域の高齢化、少子化に対して、いかに活性化すべきか。
- ・社会教育の地域への関わり方をいかにすべきか、公民館連合の連携模索。
- ・少子高齢化に伴う、協会内の後継者育成

- ・ 少子高齢化が加速度的に進み、地域の人口構成が高齢化に偏り、アンバランスになっている。地域や学校の担い手となる若い世代の流出で児童数が減り、学校の統廃合が大きな課題になっている。祭り等、地域行事を支える若い世代（児童を含む）が激減し、様々な行事自体が消滅しつつある。
- ・ 人口減が課題、マンションやアパート等に住む人の地域の関心が低いことが課題。
- ・ 医師や看護婦の不足に伴い救急医療体制が十分でない。
- ・ 過疎化の進展、人口減少、若手の担い手の確保が困難
- ・ 医師、看護師の確保に苦勞している。
- ・ 高齢化が進む中、更なる、医療確保が難しくなるのではと思う。
- ・ 薬剤師西播磨支部は、広いエリアを受け持つ、研修会等の在り方について、常に新しい方法等を教えている。
- ・ 人口減少と少子高齢化が加速で限界集落となり、地区の祭りや伝統行事等の継続した実施が困難となっている。
- ・ 空き家が増えてきている中で、維持管理が出来ていないことで草が生い茂り、近隣住民が困っているといった内容の相談が多くなっている。
- ・ 地域コミュニティ力の低下。支援が必要なひとり暮らし高齢者や認知症高齢者の増加、孤独死、引きこもり、児童虐待、貧困の拡大等
- ・ ボランティアの確保、移動手段の充実や買い物弱者への支援。
- ・ 地域での見守り活動の強化、ひきこもりや生活困窮世帯への支援。
- ・ 過疎化の進展。
- ・ 子どもが地域と関わる機会の減少。
- ・ 地域福祉活動への無関心。
- ・ 高齢化が進み退会する方が増えてきた。また、新会員の入会がない。（特に若い方）
- ・ 過疎化の進展や若い人の人口減少の為、若手の担い手の確保が困難。
- ・ 過疎化の進展、若年層の人口減少と都市部への流出により若手の担い手の確保が困難。
- ・ 若年層の人口減少。
- ・ 未婚の若年層が多く、子どもが少ない。
- ・ 若年層や子どもの地域活動（交流事業等）への関心の低下。
- ・ 「人間はミスをする生き物である」その違いから気づきが生まれ、反省して成長していく生き物であるので、地域でやり直しのできる社会を作っていく。ただ明らかな間違いも認めない悲しい人が増。
- ・ 少子高齢化が進んでいる。
- ・ 若年層の地域力が低下している。
- ・ 生活中心地の形成。
- ・ 人口減少、高齢化、住宅政策（若者の住みやすい街づくり）企業における若年労働者の就業につながる施策（教育、文化、芸術スポーツ関係、医療（出産施設）の不足。
- ・ 最重要課題は全国的な問題と同じく人口減少と高齢化が進んでいることである。
- ・ 昨今のデジタル化、IT化による急速な変化に、特に北部地域の環境が遅れている。
- ・ 個人店、小店舗が減っている。
- ・ 高齢者の独り暮らしが増えている。
- ・ 周辺地域に比べ、人口は増えているにもかかわらず、ベッドタウンになっているため、これといったスポットも少ない。
- ・ チェーン店が増えた影響で昔からの商店や小規模なお店の状況は厳しい。
- ・ 消費人口減少にともない、商業中心に店舗の減少がコロナの影響により加速的に減少に向かう事と懸念する。
- ・ 少子高齢化は全国的な問題の中で、大学進学の際に自宅から大学に通うことが出来

ない事が、地域に子どもが残らない原因。(都会での生活率 90%)

- ・過疎化の進展、若年層の都市部への流出に伴う人口減少により、担い手の確保が困難
- ・少子高齢化及び過疎化による人口減少によって、地元での消費低下。
- ・観光資源の乏しさによる、県外または市外からの来場者不足。
- ・少子高齢化、過疎化。
- ・マイカー時代になり、公共交通の利用者が激減。
- ・人口減少、特に少子高齢化に伴う若年層の減少。
- ・製造業を中心とする企業減少。
- ・子どもの減少と高齢者の増加による地域社会の変化。
- ・過疎化が進み空き家が多くなっていった。限界集落が多くなると思う。
- ・農業も林業も作業に携わる者がいなくなると思う。
- ・地球温暖化に伴う海水温の変動により、日本近海での台風の発生頻度が増え海の環境の変化とともに、漁船漁業・かき養殖業等漁獲量にも影響を与えております。
- ・若手の担い手の確保が難しい。
- ・漁業者の高齢化と新規就業者の減少、漁獲量の減少と獲得時期の遅れなど。
- ・都市部との比較で、山間地が優れていると思われてきた自然環境が、その保全の担い手の不足により、従来のレベルが保持できなくなってきたこと。
- ・多くの団塊の世代が 70 歳を超え、高齢ドライバーが増える。歩行者、自転車の人も増える。
- ・少子高齢化による若い世代の働き手不足。
- ・就職しても長く続きにくいとの声が多い。
- ・若い人の地域活動参加や奉仕活動への無関心化。
- ・過疎化の進展、若年層の人口減少と都市部への流出により、若手の担い手の確保が困難。
- ・会員の高齢化と若年層の無関心による協会未加入者の激増に歯止めをかけるための方策。
- ・人口減少により雇用確保が困難、特に理系求職者は都会へ流失している。
- ・大学、専門学校への進学率が増加し、高卒での就職率の低下で中播磨大手企業との採用競争では不利となっている。(地元のメーカーで働いてくれない。)
- ・地元以外への就職傾向が影響し、特に若手社員の確保が厳しくなっている。
- ・総人口の減少により消費需要が縮小し、廃業の増加で地域経済への悪影響を及ぼしている。
- ・重症、重篤患者を受け入れられる三次救急医療施設への搬送に要する時間が長い。(現状約 1 時間)
- ・交通網の整備として、幹線道路の整備、電車発着数増便などで地理的隔離の改善が必要。
- ・過疎化の進展、若年層の人口減少と都市部への流出。
- ・瀬戸内海の景色と城下町が融合したまちづくりで県外に向けたアピールが必要。
- ・西播磨地域唯一の関西福祉大学との様々な交流や活用。
- ・近年、高卒の生産技能職採用の希望者が少なく、労働力の維持確保が課題。
- ・中学生以下の生徒数の減少、高齢化、人口減少が止まらない。
- ・小売り等の事業者は、町内外大型商業施設の影響と人口減少など経営状況は厳しい状況が続き、事業主の高齢化と後継者問題も深刻。
- ・工業では、後継者問題、労働者不足も深刻な問題。

Q 3 : 地域課題等に関する現在の潮流や 20 年前と比べた地域を取り巻く環境変化

- ・ スーパー、医療関係の充実はすごい。反面、市外への通勤通学が多く 昼間には若者が少なくなり、有事の時の対応に不安有り。
- ・ 農村地域であるため、水田な圃場整備も実施され農場はし易く、大型機械も使いやすくなり 農業の近代化が図られてきた、しかし、農業の担い手が少なくなり個別経営から組織経営に転換され、耕作範囲が決まっているために放棄された農地が目立っている。
- ・ 婦人会組織が崩れたのと同じように自治会も同じ状況にならないか心配している。 会長職等になり手が無い。
- ・ 高齢化に伴い、活動が停滞し、助け合いの精神が欠如、活動への参加意識が薄くなった。
- ・ 若い人は、就職、結婚するとほとんどが地元を離れ親と同居がなくなった。
- ・ 高齢化による、自治会を抜ける人が増加。
- ・ 自治会の加入者が低下、地域交流も少なくなった。
- ・ スーパー、コンビニが増加、小売りの商店が減少。 北部地域では売上げの低下によりスーパーが撤退した地域がある、買い物に困難が生じている。
- ・ 近年革新を遂げた ICT 技術は個人レベルでは若者を中心に生活に溶け込んでいる、地域レベルでは、他者との対面を必要とせず気軽にコミュニケーションができるようになった、便利さと引き換えに「人がつながること」の概念が変わってきた。
- ・ 地域コミュニティの希薄化。 自治会への加入率の低下。
- ・ 保守的な考えの人が増加
- ・ 中心から遠隔地は、高齢化と過疎化が急速に進み、空き家が増えている。旧来の住民と新しい若年層の地域コミュニティの希薄化傾向。
- ・ 後継農林業者の減少により、山林、田畑の荒廃化の危惧。
- ・ 若年者の伝統行事の不参加による継承危惧。
- ・ 高齢化により敬老会行事等の不参加の増大。
- ・ 大型店舗の進出により、近隣の店舗が無くなり、高齢者の買い物難民が増加。 ネット購入による宅配の増加。
- ・ 自分、家族のための活動だけで、手一杯に感じている人が増えた。
- ・ 婦人会、子ども会、老人会等の地域団体が、人口減少や高齢化、少子化、地域コミュニティの希薄化により、団体の解散や組織運営が困難となってきた、これらの地域活動等の縮小により、地域のコミュニケーション機会が減少し、独居住民等の孤立化なども危惧される。商業店舗撤退や廃校等により、これらを起点とした住民の交流や活動、関りがなくなったことにより活気がなくなった。
- ・ これまでの暮らしの伝統を知りつつ、マスコミから流れ出る情報に心を捕われ、これまでの生活文化を維持し、次世代に伝えられない悩みにつつまれている。例えば、食文化、とうふ、みそ、こんにゃく、餅等について、自家製が当たり前だったが、買うことが主となり、そのために現金を稼ぐことに心をとらわれて、本来培われてきた食文化の技術が忘れ去られようとしている。 信仰や農作業に関する季節行事についても省略されつつある。
- ・ 農業従事者の高齢化がすすむとともに、これまで使われてきた 農業機械が老朽化し買い替える資金調達が出来ない状況がある。
- ・ 各集落では、子供会の組織の消滅、地域コミュニティも若年層の参加が見られなくなってきている。
- ・ 消防分団も地域外居住者が年々多くなり、防災等に不安。
- ・ 子供たちの通学する姿を見かけなくなっている。(スクールバス、少子化によるもの)
- ・ 子供たちの遊ぶ姿を見かけなくなっている。同級生、友達が少ない環境に変化してき

た。体力に2極化が見られる。

- ・若年層の地域コミュニティの希薄化、各種団体の必要性がなくなっている。
- ・行政と住民による「協働のまちづくり」が重要になってきている。
- ・若者の流出、高齢化、により、自治会等の構成組織（子供会、婦人会、高年クラブ）が消滅しつつある。
- ・学校の統廃合により、学校数が減った、無くなった。規模（児童数）の格差が大きくなった。
- ・地域から都市への移住の増加により、若者の人口減少は顕著である。利益率から、公共交通機関の廃止撤退が続き、地域は衰退の一途。このため、高齢者の足の確保が課題。
- ・少子高齢化により、子どもの声が聞こえない、リーダーシップを取れる人材がいない。
- ・子供会の存続が難しい。秋祭りの子ども神輿等の取組みが困難。沈滞ムード。
- ・高齢化、人口減少により、地域のイベントの減少。
- ・高齢化、人口減少により、後継者不足により農業の減少。現状を維持することも厳しい状態。
- ・耕作放棄地の増加、獣（シカ、イノシシ）の増加による柵に囲まれた農地の増加。
- ・ごみの分別化が浸透。分別作業は困難であるが、分別の利点への市民の意識向上を感じる。
- ・核家族が増加、地域とのコミュニケーションがとりにくい所の差が大きい。都市化と昔ながらの土地との差が大きくなってきている。
- ・他地域からの転入者が多く、地域コミュニティの希薄化が進む。
- ・大型店舗の進出で小規模事業者の廃業が進んでいる。
- ・組合員の高齢化と独居世帯の増加。
- ・PTA、スポーツクラブの活動が増え、子ども会で活動する時間、活動内容の重複で会の存続意味が無くなっている。
- ・子供会への加入率が低下。
- ・ネット社会の急激な進化により、SNS等によるトラブルが増加。子ども達の主体的な活動の機会が減少。
- ・インターネット、ゲームの普及により、大きく変わった。
- ・青少年団体（ボーイスカウト、子供会、各スポーツ団体等）の加入率の低下等により、青少年の育成活動が年々難しくなっている。
- ・人口減の急速な進化により、商店が次々と閉店し市北部地域では、買い物難民状態。
- ・高等学校自然科学部の活動で、市と連携を図り、生物絶滅危惧種保全の活動をしている。近年、鹿の食害による被害が大きく、生態系が崩れているので、植生調査等に取り組んでいる。
- ・高齢化、地域コミュニティの希薄化。地域全体のリーダーがいない。
- ・現在、地域活動団体を支えているのは、70～80歳代で後継ぎがない。
- ・貧困層の増大で文化・芸術への時間と余裕がない。
- ・在住外国人数が増加し他住民の関心も高くなってきている。
- ・学校にゆとりがない（多忙化が改善されない）
- ・考え方の多様化。少数派を尊重しようとする考え。
- ・少子化により、子供会のない地域、加入者の少ない地域が増え、活動内容や規模が縮小傾向にある。PTAの在り方にも課題。
- ・駅が整備され、駅周辺に住宅が増えている。
- ・少子高齢化が進み、在宅医療のニーズが高まった。認知症患者の増加。
- ・空き家の増加、自治会等住民間の連携が取れていない。「近隣との付き合いが困難、煩わしい」という理由で、自治会を脱退する。入会しない住民が増えてきている。
- ・各種団体の役員になることの負担感、個人主義の加速により、ボランティアグループ、老人会等への加入が低下している。

- ・個人の薬局が減り、ドラッグストア中心になってきた、一方で、そのDSが会員になってくれない。
- ・人口減少、少子高齢化が進行する中、地域社会や家族形態が変容し、個人の価値観やライフスタイルが多様化している。
- ・老人クラブ会員の減少や会の休止や解散が増加しており、地域活動が低調になってきている。
- ・ボランティアの高齢化により、グループ数の減少傾向にあり、ボランティアの発掘と要請が急務である。
- ・大型店舗の進出やネット販売により町内の消費は町外へ流出し、小規模事業者の廃業が加速。
- ・働く女性が多くなり、昼間自由な時間を維持できない人が多い。
- ・超高齢化している。
- ・若年層に限らず、地域社会への参入に消極的な人が増えている。
- ・人口が少なく行事も減っているため、人と人との付き合いが希薄である。
- ・自治会・婦人会・子ども会など任意団体への加入は強制できない。加入してもらいたいならメリットを提示。
- ・人間関係の希薄化が叫ばれていますが、身近な積み重ねの人間関係が希薄化になり、新たなSNS等Webでの出会いによる人間関係が濃厚化になっただけである。
- ・子どもが外で遊んでいる姿をほとんど見なくなった。中高生もたむろしている所を見ない。地域のイベントの時だけ見かける。老人は元気そう。
- ・人口減少、少子高齢化が進行している中、各地区で防災訓練が行われている。
- ・三世代の交流行事が継続されている。
- ・外灯のLDE化。
- ・商店や中小企業の廃業・減少（人口減少による売上減少により後継者がいても承継しない、また後継者が都市部の別の仕事に就いているなど）
- ・工業関係も地域筆頭企業の仕事量減少、脱炭素社会（発電ボイラなど）で苦戦している。
- ・道路は整備された。
- ・人の動きが消えた。
- ・後継者不足、収益悪化のための廃業が増えており、今後はさらに事業者の廃業は加速していくと思われる。
- ・他地域からの人口流入が増えた。
- ・調整区域があるので、子育て世代が家を建てられる場所が限られてしまう。
- ・高齢化による人口減少が、ますます加速して過疎化が進む。
- ・世代交流が出来ていないのが全ての原因要素である。今できる新しい事を受け入れる体制が整っていないことと、地域の持っている力（原動力）を活かせていない。目線が都市部に向きすぎていると感じる。
- ・若年層、子育て世代については、郊外大型店舗やネット販売により消費が市外へ流出し、市内小売業者の廃業、撤退が加速している。
- ・大型店の進出による市内商店街等の衰退。
- ・近所付き合いもなくなり、冷たい世の中になった。
- ・進学、就職、結婚により、市外へ転出することによる若者の人口流出。
- ・日頃から地域外で過ごす人が多くなり、地域内消費の減少。
- ・農業を通じた地域住民や世代間の交流機会の減少。
- ・権利主張の時代になってきた。(学校教育の問題)
- ・世の中が損得の考え方になってきた。
- ・地域道路網の未整備並びに雇用の流出に伴い、高齢化社会による過疎化の進展と空き家の増加とともに地域防犯の悪化を招いており、将来を担う子供たちと地域との触れ

合いが希薄化してくる。

- ・ 漁業の後継者がいなくなり、浜の活性化が薄れているような感覚がある。また、空き家が目立つようになってきた。
- ・ 耕作放棄、山林経営の放棄などが多く発生しているが、これは、人口の減少や高齢化だけでなく、経済の仕組みによる変化が、より地域の格差を助長していると思われる。地元の努力だけでは、もうどうしようもない事態になっている。
- ・ 車両が増え、道路はそのまま。走りにくくなっている。
- ・ 大型店舗の進出により商店街が簡素化し、地域のふれあいが無くなった。
- ・ 学校週休二日制の導入による学力低下を著しく感じる。
- ・ ゆとり世代が成人を迎え、適切な指導をできる大人が減った。
- ・ 子どもを家庭、学校、地域一体で育てるという意識が希薄になりつつある。
- ・ 各地域では自治会や子ども会への加入率が低下し、地域コミュニティの希薄化が進み、子どもの社会性を担う場としての役割が果たせなくなっている。
- ・ 人口の減少による会員数の激減と関係機関の合併等による当協会も2団体が合併し現在に至っている。
- ・ 商業経営者の高齢化による廃業で、商店街の衰退が顕著で、中心市街地はまったく活気がない。
- ・ 製造業における環境規制が年々厳しくなっており、今後CO₂排出規制も厳しくなることが考えられ、工場経営の収益を圧迫する懸念がある。
- ・ 業種を問わず、小規模事業者の廃業が極端に増加している。
- ・ 事業承継調査から小規模事業者の62%で後継者がいない。そのうち8割で廃業を考えている。
- ・ 牡蠣を求めて冬期においては、交流人口が増加し、宿泊業や飲食業にとって牡蠣は重要な地域資源となった。
- ・ 地縁関係の希薄化により、地縁的な活動への参加の低下を招いている。
- ・ 電力の自由化に伴い、太陽光、バイオマス発電が生まれている。
- ・ 若者の就職に対する価値観が、地元での安定型から好待遇を求め、変化している。
- ・ 時代の変化に対応し、ネット販売へと移行するものの、消費者の志向も多種多様化し、大型店には、太刀打ちできず、各店が特色ある店づくりを考え努力しても厳しい。
- ・ 町内の工場も、10年前から移転、撤退が起き、今後の廃業者の増加は現実的な問題となっている。
- ・ 第三社者承継などのレベルにない事業所や身内への事業承継を考えていない事業者も多く、補助金、セミナー参加への反応も鈍い状況。

Q 4 : 地域の将来像 (地域の将来への思いや目指すべき姿)

- 地域コミュニティを活性化させ、共助により若者（特に子育て中の女性）が安心して、働ける地域にしたい。
- 農村人口をいかに増やすか、地域の持つ良さ、魅力を発見し、都会、他地域へPRし農村人口を増大すべき。
- 現状では将来像が描けない、ボランティア精神が薄れている。
- 緑豊かな集落、四季を感じ暮らせる故郷。
- 高齢者が住みやすいコミュニティの確立と共助による地域の強化。
- 人と人とのふれあいを高め、安全、安心な地域。
- 定年延長で働く人が多くなり地域まちづくり、地域防災等参加者が少なくなっている。
- 人口減少が進んでも、今住んでいる地域に住み続け、地域の文化や特徴が生き続けている。人と人のつながりのある地域。地域住民が協力し合える日常をおくれる地域。
- 地域課題は、自分たちで解決していくという共通意識が根付いた、住民が互いに力を合わせ助けあえる地域。
- 自然と共生し、豊かな自然や田園風景を後世に残したい。
- 共助、互助、近助による地域コミュニティの強化、補完。(地域共生社会の実現)
- 隣近所との一定の関りのある温かい共生集落。田舎と都会の交流社会により伝統行事の存続。
- 市内に多くある空き家を公費補助により整理し地域の活性化につなげる。
- IT等を活用しながらも地域の直接的なかかわりを減らすことなく、連携がとりやすい地域でありたい。
- 地域住民が来訪者とともに、生き生きと暮らせる地域づくり。
- 地域出身者が関わりたい（時々帰りたい）と思える地域づくり。
- みんなが住みたいまちづくりを目指して、真に心の豊かさを感じる共助協働の住民集団となる。
- 地域収支の黒字を目指して、売る、稼ぐ仕組みを成立させる。
- 自然と共生する人づくりと村づくり。自然を生かした行事の活性化。
- 子育て支援を地域の課題として捉え、若者が安心して住める地域社会を構築する。
- 買い物、病院に不自由なく行ける。(医療体制の構築)
- 若者の帰省地として・・・
- コンパクトシティーの実現
- 極度の都市への人口集中は、衣食住、環境問題、大規模災害に対応できない危うさがある。危機管理上また魅力ある暮らし方は、地方に優位性があり、これからが暮らしの転換期になるように思います。
- 人口がなるべく減らないようにしたい。
- 若い世代に定住してもらいたい。(自治体からの補助)
- 人のつながりを大切にするアナログ的な地域社会とデジタル社会の共存。
- 人口減少に伴い伝統行事の維持、高齢者による農業生産の維持は中山間地では難しい。
- 地元で働くことができる、地域の特性を生かした職場で元気住民の姿。
- 公共的な建物を生かし、地元で高齢者が集う「いきがいセンター」が必要。
- 自然豊かな環境を生かし農作物の販売。
- 福祉施設へ地元住民が入所出来る体制を。
- 世帯数の減少に伴い、自治体が減少する。
- 人口維持し、人と人の触れ合い(交流)を大切にする地域社会。(経済重視の世の中は、はみ出し者を作るだけ)
- 自然と共生する人づくり、まちづくり。
- 共助による地域防災力の強化。

- ・ 恵まれた環境の特性を生かし、水産物、自然を次の世代に残しつつ、若者が住み続けることができる環境（企業誘致）の実現。
- ・ 住民が主体になり活動できる地域。一人一人が大切にされる社会。（シンプル イズ ベスト）
- ・ 人口減、コロナのため行事の運営もなくなり、子供会の存続が危うい。
- ・ 子供たちの健全育成のための組織作り、小学生中心の子供会活動に、中学生、高校生、大学生、大人が関わり「つながり」のある地域コミュニティ。
- ・ 高齢者の互助が出来る生活。
- ・ 働ける場所、生活環境（買い物するところが減っている）の整備。
- ・ 災害、疫病に対する安心、安全なまちづくりを切望。
- ・ ふるさと意識を醸成する教育の育成。
- ・ 在住外国人との交流（情報交換）が出来るようになってほしい。
- ・ スポーツによる健康寿命の増加（スポーツ立市）
- ・ 観光資源を活用したスポーツ活動。
- ・ オンライン診療になっているであろう、人と人の繋がりがなくなる。
- ・ 心豊かな人の醸成される風土、文化を大切にする。
- ・ 地域共生社会の実現に向け「ふくしでまちづくり」
- ・ ご近所で集会所等を利用して集える日々があると良いと考える。（助け合いながら）
- ・ 人と人との触れ合いを大切に誰でもが参加しやすい地域づくり。
- ・ 地域の中でお互いが助け合い、世代を越えて交流のある地域社会
- ・ 若年層が農業を継ぎ、荒れた地が減ってほしい。
- ・ 犯罪や非行のない明るい社会はすべての人々の願いであり、次代を担う子ども達が健やかに育つ地域社会が安全安心な社会づくりの基本であると思う。
- ・ イベントを増やし、老若男女の交流を増やす。そのための予算が必要。
- ・ すべての人が健康でいきいきと暮らすことが出来るまちづくり。
- ・ 自然や文化を大切にするまちづくり。
- ・ 比較的恵まれた自然と交通（公共）の利便性を活かした住宅都市（住・勤近接）若者人口増（若者世帯・子育て世帯の定住増）に伴う、商店やニュービジネスの市域での創業・立地など。
- ・ テクノ研究者、外国人などの定住。（地方都市への若者回帰）
- ・ 女性が活躍できる社会（男女雇用機会均等法）が本当に守られる働き方改革。
- ・ 市民一人一人の取り組みが地域を支えるという自治意識の高まり（地産地消）（地元への定住促進）
- ・ 子育て世帯の支援策充実により、地元に住んでみたいと思える町。
- ・ いま住んでいる子供が大人になっても、地元に住みたいと思える町。
- ・ 飲み屋が賑わって、夜の街が元気な活気のある町。
- ・ デジタル化が進む事により都市と地方（田舎）との格差が増すと同時に、若者の田舎離れが進む事は目に見えている。そこであえて田舎はデジタル化の町にするのではなく、スローライフを楽しめるアナログの社会の町（昭和）に戻すことだと思う。
- ・ 安心・安全な暮らしが一番、次代が進んでも人が生活をする最低限のことである。
- ・ 地域をリードする産業の誘致と、農業・漁業の担い手の育成。
- ・ 人と人との触れ合いを大切に思える様に。
- ・ 子育てと仕事の両立支援や地域全体で子育てを支える仕組みづくり。
- ・ 若者・Uターン者への雇用の創出。
- ・ 地域の良さを世代を越えて継承できる地域づくり。
- ・ 自然を守り共生する人づくり。
- ・ 政治に携わる人の協力体制づくり。
- ・ 海の環境が蘇り豊かな海に再生されることにより、新鮮な魚介類が提供でき、食の安

全性の確保・雇用の創出も図れる。

- ・歴史ある港町として受け継がれてきているため、景観・漁業者を後世にも残したい。
- ・戦後、高度成長期に多様な場面で「地方が都市部への供給源」であったが、それ以前は、独自の経済や文化が育つ地域であった。都市部集中が今後も続くとして、地方・中山間地域の役割を中長期的視野で、将来を背負う若年層と検討したい。
- ・ふれあいを目的にイベントを企画しても参加が少ない。（老婆ばかり）防災訓練も参加が少ない。地域を意識しない人が多い。昔ながらのふれあいを大事にした地域社会とデジタル社会との共存。
- ・人間同士の温かみのあるコミュニティと先進技術の積極的導入の調和が必要になってくる。
- ・共助による地域防災力の強化
- ・現在の行政区割りをもっと大きくして、西播磨全体で一本化した行政サービスに伴い、当協会についても合併による組織合理化を図ることにより、サービスの向上を目指す。
- ・地域資源（観光資源）を活用し、1年を通じて人が何度でも訪れたい魅力あるまちづくり。
- ・人口減少に歯止めをかけるための人口増加政策とした移民社会の実現。
- ・コンパクトシティの推進による財政、経済の効率化。
- ・若者・子育て世代で賑わう、健康・医療・福祉サービスが整ったまち。
- ・古い街並みを残しつつ、近未来に見合った人情溢れる地域。
- ・大企業と中小零細企業とがお互い協力し合い、活気あふれる地域
- ・さらに人口減少により限界集落が増加するであろう、中心地と周辺集落との機能的なすみ分けなどされているのかと想像する。AI技術の発達など自動車の自動運転などがさらに発達していると予測されるが、線路を走行する列車こそ無人・自動化をすすめ地方路線等の公共交通手段を確保、都市部との通勤時間等も短縮、都市部への通勤圏内の地域として発展可能になっていることを願いたい。そして、高速通信網が都会と同様に整備され、テレワーク技術の発達により企業のオフィス分散などで利用される地域となることも願いたい。

Q5：地域の将来像（ポストコロナ、自動運転、ドローンでの配達、テレワーク等、テクノロジーの進歩等を踏まえた地域の将来像）

- ・ テレワークの定着により都市部からの移住（人口の首都圏集中の緩和）が増え、若者が出ていかない町に。（安心して働け、定着でき、働く環境が整備された地域・場所を選ばない働き方）地方の活性化につながる。
- ・ ITを活用した農業生産の振興、オンラインによる農産物の販売促進等生活の上においても高齢者が安全安心して生活できる社会を目指す。
- ・ 高齢者が安心して生活できる施設の充実。
- ・ 鳥獣対策を充実させ、安全で暮らせる故郷。
- ・ 医療が容易にできる環境づくり。先進技術を駆使した医療体制の充実、働き方の充実等、利便性と安全性が向上し先進技術により地域の不安が解消。
- ・ 交通事故が無くなるよう安全安心な整備（設備の設置）
- ・ 多様なライフスタイルが選択できる環境の提供。
- ・ テクノロジーの進歩により、若者の農林業への定着。
- ・ スマホで水管理するスマート水稻農業。
- ・ テレワーク、ノマドワーキング等の働き方により自然を感じながら地域で暮らす若い世代の増加。
- ・ 自動運転の進歩による高齢者や障害者（交通弱者）が自由に移動できる社会、交通事故のない安全・安心な社会の整備。地域内の交流も活発になる。電気自動車へ、CO2排出減
- ・ 光ファイバーが全戸に通じているので、活用方策を考え、実行する組織をつくる。（高齢者もデジタル活用し、パソコンが使える）
- ・ 空き家への移住、リモートによる稼ぎを推奨し、支援する組織、仕組みをつくる。
- ・ コミュニティの充実（アナログとデジタルの共存）
- ・ テクノロジーの進歩により、地方の楽しい暮らしの魅力が増し、自己実現が可能になる。各家庭へのパソコン配置により、行政から情報が確認できるよう Wi-Fi を整備。スマートホンが通じない地域には電波状況の改善が先決。
- ・ 地の利を生かして、企業のサブステーション誘致を進める。
- ・ 天文台公園、スプリング8、県立大等を武器にした戦略を推進。町の活性化を期待。
- ・ 遠隔手術やオンライン診療の整備による過疎地の医療不安の緩和。ICTを活用した医療介護の連携システム。
- ・ 文化、自然を残しつつテクノロジーを進歩させる。
- ・ 技術の進歩による、買い物支援。
- ・ 子供たちがオンラインで全国の他地域、海外等の多文化の子どもたちとの交流を通して境界を越えたグローバルな地域、平和な世界の実現。
- ・ 次世代農業（AI等）の普及により就農で生計が立てられる。若手の農業への参加を期待。
- ・ 情報技術（IT）の活用により、児童生徒、高齢者等の見守り活動の推進等現在の課題となっている諸問題を解決したコミュニティづくり。
- ・ AI活用が誰でも（高齢者）使えるよう整備していただきたい。
- ・ 医療・看護・福祉の地域包括的連携による、一人ひとりのICTネットワークの構築。
- ・ 子どもの頃から、電子ゲームで遊び、川や野原で体を動かして遊ぶ事をしない、子どもの頃の遊び方が次の世代の社会をつくる。
- ・ インターネット（Facebook、LINE）で事業紹介する方が、チラシ、広報誌よりも効果が見られた、イベント広報等に継続して利用していきたい。
- ・ 対面対応の必要性を感じる。
- ・ 田舎ならではの良さを守りつつテクノロジーを駆使した若者が定着できる環境づくり。

- ・ 場所を選ばない働き方や、地方でも若者が定着して生活できる環境の実現。
- ・ I Tを活用して、高齢者が職に就けるような環境の実現。
- ・ 都心部へ流れる若年層が地元に残り仕事が見つけられる環境。(デジタル社会によって場所を選ばなくてよい働き方)
- ・ 便利な社会になる喜びは大きいですが、あらゆる情報を取り入れることが出来、人に頼る、また相談することが無くなると、核社会を生む。
- ・ 自動運転よりも密なバス運行計画が必要。バスさえも利用が少ない。元気な老人も少なくなり、若者が収入を得る場がないことが問題。
- ・ 一生運転(自動車)しても安全性を実現できる車の開発。
- ・ オンラインつながりで、コミュニティ。
- ・ 市内での自動運転バスなどの運行(播磨科学公園都市で実証中)
- ・ 相生に住んでいただき、播磨科学公園都市へ、研究施設へ、田園地域・海浜地域のサテライトオフィス化などによる人の動きが感じられる街にしていきたい。
- ・ テレワークによるワークライフバランスの充実。
- ・ 高齢者が自由に移動できる社会(次世代自動車の普及)
- ・ あえてテクノロジー化に進む事ではなく、スローライフが楽しめる人間味が作り出せる街にする事が大切である。
- ・ 人の繋がりが欠如していく可能性がある中でI T主流の生活は今後欠かせない。特に教育、医療は進化が期待される。自宅にいても田舎暮らしでも都市部の生活と変わらなく暮らせる。
- ・ 就労地を選ばない環境の職場が増えることにより、人口流出の歯止めとなる。
- ・ 高齢者が自由に移動できる様な自動運転化。
- ・ 地方に移住して生活ができる環境。
- ・ 技術の進歩によって働き方、生活がしやすくなるが、人との関わりに変化をもたらし、目指すべき子育て支援などへの影響が危惧される。
- ・ 高齢者など、誰もがテクノロジーの恩恵を受けることができる優しい環境の実現。
- ・ 先端技術の進歩に伴い、人とロボット等との共存共栄を図らなければならないが、人間としての価値観を見失わない様にすべき。
- ・ 都市部との格差を埋めるには、利害や費用対効果を重視したプランでは難しい。華やかな部分の発展も大切だが、例えば食を支える第一次産業や高齢社会のための科学技術の進展が望ましいし、有効に活用される政策が求められる。
- ・ 若者が働ける企業や商店を開発しなければいけない。
- ・ 団塊の世代が高齢者運転手になり、交通事故が増えることに對し、何かいい方法はないか？
- ・ 自動運転の進歩による高齢者が自由に移動できる社会、交通事故のない安全・安心な社会。
- ・ ポストコロナについては、収束を見ない状況であり、ウィズコロナの不安を軽減するためにコントロール(テレワーク等)をする方法を、ストレスを溜めこまない方法についてのカウンセラー等の設置。
- ・ 自動運転については、高齢社会においては、通院、買い物等の足として、自動車は必要不可欠であり、自動運転車両の普及は、現代社会において問題視されている高齢者事故を防止する意味でも必要と考える。
- ・ その他、ドローンによる空中配達、ロボット技術を活用した宅配サービス等、都市部の発展に遅れないようなインフラ整備を進めることが必要である。
- ・ 公共高速ネット回線、5G通信網の整備が進み、各種の行政手続きのオンライン申請が可能となり、遠隔操作を活用したサービスなどが可能となっていてほしい。
- ・ 各通信が公共(無料もしくは格安)となり、田舎でも利用可能となり独居老人等の安否・緊急連絡の手段などの整備されていることを望む。

Q6：地域の目指すべき方向性

- ・地域に愛着を持つよう、地域の子どもは地域の大人が見守り、育てるといふ、数十年前は普通であったことが「現在～これからの時代」に必要なと思う。将来地域を守る青少年の育成。地域行事は子どもが多く参加するように取り組む。交流できる施設の整備。コミュニティスクールとして学校、家庭、地域が一体となって多くの大人が総がかりで地域の子どもを育てていく仕組みを地域に作っていく。
- ・農村地域に居住する人の増加への取り組み。地域の魅力発見、地域の宝物等を SNS 等で紹介し、地域を知ってもらおう事から取り組む。先ず、受け入れ態勢を創設することが必要。
- ・自治体のあるべき姿を根本から見直す必要。
- ・誰もが地域活動に参加し、ご近所のつながりを持ち、助け合う社会。
- ・生活基盤となる働く場所の確保。暮らしやすく魅力ある条件整備が必要。
- ・子ども、高齢者の見守り活動。災害発生時の共助の仕組みづくりに取り組み、地域住民同士の繋がりを強化する。
- ・災害に強い地域社会の形成、活気に満ちた地域社会の実現には、地域に住まうあらゆる世代が個々で世代間ギャップや考え方に違いを認識し、社会情勢の変化を柔軟に受け入れる必要がある。地域住民が互いの意見・立場を尊重しながら、共助が地域社会には必要だといふ事を認識してもらえよう仕掛け・取り組みが必要。
- ・共助、互助、近助による地域コミュニティの形成。
- ・公共交通利用の促進。定住のための交通面の発展。
- ・自然環境、河川愛護、周辺景観に配慮した田舎の良さ（桜並木の整備等）を残した地域づくり。（住民が集える場所づくり）
- ・JC 世代（20～40歳）が活気を持ち、地域を引っ張っていくような取り組みが必要。
- ・既婚率の向上、次世代の育成。
- ・地域おこし活動（学校跡地で旅館経営、食堂経営、農産物や木炭の生産販売等）による収益の向上を目指す。
- ・女性グループを組織化し、地域の活動に参画する体制づくり。
- ・高齢者に対する福祉。
- ・地域に光を当てる取り組み、やりたいことができる取り組み、年代別に対応できる取り組み。大学、企業が地方地域を活性化する方策を提案して欲しい。
- ・限界集落をなくすよう、地域全体で課題に取り組む。
- ・過疎地ならではの手を入れない自然の活用を模索すべき。野生動物の保護区等を取り入れながら、ジビエ生活体験地域を目指す。
- ・企業や投資家所有の山林の管理が必要だが、管理に見合う収益性の確保を目指す。
- ・次代の役員の担い手、地域を牽引するような青少年の育成。地域の雇用を確保する。
- ・現状維持のためにUターン、Iターンを推進し、空き家を増やさない。
- ・若者が住みやすい環境づくり。一旦田舎を離れてもまた戻ってくるような、誇りを持つて、魅力ある地域づくり。
- ・ごみの分別を促進、減量化、資源ごみの再生等により、環境問題に取り組む。
- ・地産地消の発展に取り組む（地場産の食材（カキ等）を消費）
- ・悪徳被害防止に取り組む。（出前講座、キャンペーン実施により啓発を促す）
- ・文化財や伝統的なイベントを大切にし、地域のPRになるような取り組みをする。
- ・田畑を活用し、農産物を生産する取り組み。
- ・地域と生協の繋がりを深め、協働による地域課題の解決に貢献。
- ・子供たちがオンラインで全国の他地域、海外等の多文化の子どもたちとの交流を通して境界を越えたグローバルな地域、平和な世界の実現。
- ・ボーイスカウトは自然の中で活動し、自然を愛し、思いやりのある青少年を育て、地

- 域を牽引する立派な社会人を育成する活動を継続し、実施する。
- ・「赤とんぼ」と童謡の里等、インバウンド観光を推進。
 - ・先人の作った財産を磨く。地域によって異なるはず。
 - ・子どもの教育から考えるべき。一応大学へ行くための勉強と、子どものときに身に着けなければならない事を学校で教えるべき。
 - ・日本語学習事業を強化するため支援ボランティア増加に取り組む。
 - ・外国人青少年を育てるため、児童の居場所づくりと学習支援に一層の努力。
 - ・スポーツで世の中を豊にしていこう。そのためには地域の繋がりを大切にしていこう。スポーツ推進委員は地域を支えひっぱり役を担う。
 - ・社会教育と学校教育の連携を深め、青少年の育成に努める。
 - ・年2回の研修会で啓蒙。(社会教育連絡協議会)
 - ・コンパクトシティの実施。町の中心地における公共機関(施設)の充実。
 - ・地域医療の充実強化のための医療従事者の確保。
 - ・地域において急性期から、回復期、慢性期、在宅医療、介護に至るまで切れ目のない医療・介護サービスを提供できる体制を作る。
 - ・認知症患者を早期に発見し、診断から治療につなげる。
 - ・観光地としての取り組み。
 - ・地域の助け合いの社会が必要。住民同士が集うまちづくり。
 - ・薬剤師の仕事をもっと考えていくように会としても努める。
 - ・介護保険制度等の施行により、高齢者の日々の暮らしの場が変わりつつある中で、人と人との繋がりと制度のみにとらわれない人間らしい生活。安心して暮らせる地域を、今一度考え直さなければならない。
 - ・地域ニーズの把握や資源開発等、地域課題の解決に向けて地域住民と共に考え、地域住民による協議の場づくりや支え合い活動を支援する。
 - ・宍粟市社会福祉協議会では今年8月に「第4次地域福祉推進計画」(2020年度～2024年度)を策定した。
 - ・自然環境や周辺景観に配慮した循環型社会や低炭素社会への取り組み
 - ・集う場所の充実、古民家の活用、集っておられる所での食事接待等。
 - ・どこの子どもでもえこひいきなく大人が見守り育てる。
 - ・災害に強いインフラ整備とともに、事前に備える体制づくりや個人の危機意識を向上させる取り組み。
 - ・母子・寡婦家庭の働いている女性が悩みや地域のことについて気軽に相談できる環境づくり。
 - ・働く環境の整備、人とのつながりを大切に、公德心を維持できる田舎をボランティア活動で人として生きる姿を維持。
 - ・地域におけるコミュニティ活動の充実、新たな担い手の育成。
 - ・様々な団体が関わり、地域活動が気軽に取り組めるよう。
 - ・利便性の高い公共場所で、商業施設、病院、公共施設の集約型。
 - ・安全安心、交通が便利、教育・文化が充実し、働く場が近くにあることを認知してもらうための地域プロモーションPR活動、播磨科学公園都市への企業、研究機関誘致、都市機能の充実。
 - ・地元雇用の促進策として、メーカー等への就職を目的にした、普通高校の一部電気科など実業クラスへの変更。
 - ・技術革新と既存技術の継承により、高収益メーカーの育成と地元雇用に推進。
 - ・インフラ整備及び住民サービスの拡充、移住者へのサポート等、官民連携による住みやすいまちづくりが必要。
 - ・生産性の向上による赤字経営の脱却やM&Aによる他業種への進出の促進。
 - ・牡蠣を中心としたグルメや温泉等地域資源を売りにした宿泊施設の創業促進。(民宿等

開業支援政策が必要)

- ・ 自然災害が増えている中で、特に防災に関する体制づくりが必要であり、企業においては同時にBCP対策が必要。
- ・ 地域を牽引するような青少年を育成するため、地域の子どもを地域の大人が見守り育てる取組み。
- ・ なるようにしかならない。仕方がないという諦め感を払拭して夢と希望が持てる構想が必要で、現在、行政と商工等で連携して定住促進に向けての施策を続けている。
- ・ 子どもたちに将来どんな職業につきたいかを考えるきっかけづくりとして、小さい子ども向けや、小中学生向けに仕事を伝える体験授業などは、町内の学校と連携して将来的に行っていきたい。
- ・ 我々の将来をまかされる人材づくりが必要。そのために、学校教育を見直すことから始めるべき、つまり、人間味のある子どもたちを育てるには、自然環境を利用して遊ばせ、心の広い考えの持てる子どもづくりが必要。
- ・ 人口減少による集落コミュニティの弱体化が進むと感じている。現在の若者世代は地域コミュニティを好まない志向が強い、その世代が地域の牽引世代になるだろう時代に向け、現コミュニティのあり方を再考する必要は感じる。
- ・ 当会組織の取り纏め役の存在が薄く今後の組織の役職後継者の問題を抱えている。
- ・ 当会は、会員事業所の経営支援に努力するとともに新規創業や既存事業所の事業承継の支援に努め、事業所の経営安定と事業所数維持に貢献できるよう経営支援等を積極的に行うことにより、結果として、組織力の向上に繋がりたいと思うところである。
- ・ 子どもの人口増は期待できない時、現状の人口を考えて高齢者（知恵袋）にも健康で働く場を提供。
- ・ 広大な田畑があり、山林もある、自然が破壊されたら人は住めない状況になるので早急な手立てが求められる、
- ・ 女性部は世代交代ができていないのが大きな問題。消費者の立場を理解し、地域に必要とされる組織を目指すことが急がれている。
- ・ 地域をけん引するような青少年の育成。
- ・ 子どもと地域とがふれあえるような活動への取り組みと災害に強い環境整備。
- ・ 交通インフラの維持を行政と一体となって行うことで、それらをストップすることを社是としている。
- ・ 「食」と「農」により、地元地域の良さを伝える取り組み。
- ・ 災害に強い森づくり。
- ・ 働き方改革によりテレワークの促進が図られれば、一極集中ではなく地元において生活・雇用が成り立つ環境の実現ができれば。
- ・ 資源管理・漁場改善の取組として海底耕運を行っている。また、漂流、漂着物、湾内の清掃などを行い、港町の美化に努めている。
- ・ 地方の役割として、何を求められているのかが明らかになれば、その方向に向かって進めることができる。たとえ、都市部の補完的な役割が第一義とされたとしても、向かう目標が明らかになれば長期的な施策が共有されて地域の活性化につながる。
- ・ 人とのふれあい、会話のある地域にするため、まず自治会から補強する必要があるが、役員のなり手がなく、総会は欠席が多く、どうすればいいのかわからない。
- ・ 地域の活動には、大人、子ども問わず、積極的に参加できる環境づくり、自他ともに考えられる人を育てる教育や模範行動の推進。
- ・ 地域を牽引するような青少年を育成するため、地域の子どもを地域の大人が見守り育てる取組み。
- ・ 交通安全啓発活動（該当キャンペーン）を通して安全で安心な地域社会の構築を目指して関係機関（市・警察・社協・老人会・学校・自治会）と連携して啓発活動を進めている。

Q7：将来に繋がるポジティブな動きやトピックス、取組例

- ・「尾崎の町を考える会」を中心に一人でも多くの子供たちが「尾崎に生まれて良かった」と思えるよう、小学校と連携し、学んでもらう。
- ・東京都内に居住している赤穂市出身者（例：赤穂会）の会を通し情報交換会等を通じて新しい情報と地方の良さを交換しながら故郷への関心を高める。
- ・3世代交流ボランティア作業として子供たちに自分が育っている地域を感じてもらおう、神社の清掃を実施している。
- ・自治会、その他団体が共同して年数回、地域の美化清掃活動を継続している。
- ・災害が発生した際、自力で避難することが難しい人の安否確認、支援を自治会、民生委員、消防団で話合っている。
- ・衰退する山崎町の商店街とその周辺を、地域の方が中心となって活性化に取り組みられ、古い空き店舗等をリノベーションし、新たに飲食店、宿泊施設等がオープンした。事業主の中には市外からの移住者もいる。
- ・地域運営組織である「船坂Lの会」が上郡町船坂地域に発足。各部会を設置し、単位自治会では解決できない課題も広域な地域運営で補完しあえる組織を目指している。
- ・地域と企業の連携。モロヘイヤの生産で鞍居地区と（株）青粒との連携。
- ・廃校利用し地域交流サロン「梨の樹」が旧梨ヶ原幼稚園にオープン。地域資源である国指定史跡山陽道野磨駅家跡の活用も活発化。
- ・災害に負けない防災意識の高揚。高齢者と子供が希望を持てる行事の取組み、空き家、古民家の活用により若者の起業化推進。
- ・少人数の近隣の住民が気楽に集まり、会話や情報交換ができる集会場が必要。
- ・青少年事業を行うことで、自分の暮らすまちへの愛郷心を育んだり、将来の活動の礎となるよう計画をしている。
- ・①地域の特産品づくり：繁盛米、桑茶、甘酒等②お米づくり体験：阪神間からのファミリーや外国人が参加し、地域スタッフと交流しながらの農作物体験活動③ゲストハウス：来訪者の自然体験や地域スタッフと交流。④地域コミュニティの場づくり：はんせキッチン（地域コミュニティカフェ）①～④の取組みのためのボランティア活動、スタッフ活動、就労等が地域住民の生きがいづくりや地域の活性化につながることを目指す。
- ・廃校に改築工事を加え、旅館業、食堂を始めたら、収益が徐々に向上している。
- ・学校跡地の運動場に7つのテント場を設けたら大ヒット。収益増。
- ・校庭緑化を考えていたところ、県民緑税による助成により、地元負担ゼロでできた。
- ・地域住民の交流できる事業（甲冑その他工作物）いつでも参加できる場所の増。
- ・高齢者のみの集落では毎週安否確認する取組みを行い、一人暮らしの人などの不安を少しでも軽減しようとしている。
- ・地域と共に行動できる組織（買い物、交通対策、高齢者が安心して暮らせる地域）
- ・防災・災害復興のノウハウがある。
- ・令和2年度兵庫県警察総合災害警備訓練が、旧利神小学校跡地で行われる。防災、復旧復興の研修所、防災用品等の備蓄基地、大規模災害の避難地等の拠点施設として、旧利神小学校跡地活用の政策提言を行政に行っている。
- ・地域に残る故事・史跡・伝統を伝える人の発掘に取り組んでいます。
- ・社協からの依頼で、各集落福祉委員、民生児童委員によりご近所ネットワークを実施高齢者の生活安全の見守り。
- ・買い物、ゴミ出し等の困っている家庭の支援。安否確認等も含めた各隣保、隣同士の取組みを進める。

- ・「みんな活」三河地区でも順次着手
- ・コロナで対面交流が減少、非対面での交流が増。ホームページ作成中。
- ・「くらしの生活展」名年開催。(消費生活研究会)
- ・空き家を利用し、移住者を増やし、再利用につなげる。
- ・自然を残した環境整備。
- ・各地で「ネットワーク連絡会」開催(コープこうべ) 関係諸団体との顔の見える関係づくり、協働のネットワークを構築中。
- ・たつの市、室津が日本遺産。龍野地区が重要伝統的建造物保存地区に選定。子どもたちが自分たちの地域の文化的な学びの機会が増加。
- ・若手による(20~40歳代) 起業(営農+6次産業、飲食業等)が増えつつある。
- ・組織として情報の共有等連携を深め、広域に活動ができるように取り組んでいる。
- ・龍野高校の自然科学部の活動で、たつの市やNPO 法人と連携を図り、生物絶滅危惧種保全の活動をしている。
- ・ボランティア募集を会員だけでなくたつの市近辺から何回も募集する。
- ・活動、事業、イベント等の広報を強化する。
- ・スポーツ推進計画が出来たのを機に、スポーツで豊かな暮らしを実現するために、具体的な動きを模索中です。
- ・ゴミの分別の自助、共助は徹底できている。
- ・買い物ボランティアの共助もされている。
- ・空き家移住者ある。
- ・西播磨に住みながら通勤できる交通の充実。
- ・学校、地域、企業が連携し、新たなカリキュラム作りに取り組んでいる。地域を担う人材を育成するため、就学前教育と義務教育の連携の強化(地域の教育力の一体性)を進める。
- ・ICTを用いた多職種連携情報共有システム「バイタルリンク」の活用
- ・在宅医療における24時間サポート体制の整備や入退院調整ルールの策定。
- ・災害救急医療マニュアル、新型インフルエンザ等対策マニュアルの作成。
- ・地域と学生の交流を増やす。
- ・農業の発展。フルーツ農園作り。
- ・働く場所と観光地の一体化。
- ・地域や移住者の起業による雇用の増加。
- ・車いすを使用する移動困難な障害者の外出をボランティアが行うことで、住民相互の支え合い活動が広がっている。
- ・話し相手(傾聴)ボランティアが在宅高齢者宅を訪問することで、助け合いの輪が広がっている。
- ・パートナーサービス事業(自治会単位でちょっとした困りごとを助け合う仕組み)
地域の困りごと応援隊事業(全体的にちょっとした困りごとを助け合う仕組み)
- ・本会が作成した福祉学習プログラムを活用し、地域や学校で福祉学習を実施
- ・自治会内で組織的な見守り活動や地域に必要な方の情報共有や地域生活課題の早期発見・早期対応につなげる「地域見守り会議」の開催
- ・近所づきあい(声掛けや気遣い等)の延長でできるご近所ボランティア活動の啓発
- ・ご近所ボランティアに取り組む地域の増加、人手不足解消に向けた農業のIT化
- ・声かけができ、困りごとをご近所で助け合う地域になるように。
- ・人手不足解消に向けた農業(家族だけでなく他人にも丁寧に上手に教えてもらえたらと思う)
- ・ご近所ボランティア(買い物やゴミ出し等の困りごとをご近所で助け合う仕組み)に取り組む地域の増加。
- ・地域おこし協力隊制度による移住者の増加。

- ・社会構造の変化により、婦人会組織のメリットが減少している。更生保護女性会としての組織づくりが必要。
- ・ボランティアできる余裕が必要。人として温かくなるために、安定した生活ができるよう、IT化が必要。しかし労力も必要。
- ・新たな賑わい創出
- ・健康づくり教室の増加。
- ・ご近所ボランティアの取組
- ・防災訓練（多世代とともに取り組む）
- ・若年労働力確保のため、隣県（岡山県）の新卒者を積極的に募集している取組みがある。
- ・山崎中心市街地活性化委員会や波賀元気づくりネットワーク協会等の民間主導のボランティア組織の活躍。その他、様々なボランティア組織があるので、その連携が必要。
- ・国・県の創業補助金は、以前から実施されていたが、平成27年から町による創業補助金の創設と商工会事業として創業塾を連動して開催してきた。町補助金の活用のしやすさが関係するのか、小規模な事業計画ではあるが創業希望者も少し増加傾向であると感じる。
- ・創業塾の参加者も自身の創業計画を考えるだけのセミナーでなく、参加者同士の意見交換の場となり、創業予定者のコミュニティの形成にもつながっていると感じている。
- ・地域性を考えるなら「もう一度あの時代にカムバック」を考える必要に迫られている。IT生活とITでは絶対にできない生活を検証すること。
- ・当協会ボランティア会員の知識や技能を若い世代に継承すべく、ボランティア会少年(Jr)部を発足し、後世への人材育成を図ろうと計画中。
- ・水田の用水管理について従来の見回りからドローンから送られる映像にて水量を把握。
- ・宍粟市の音水湖がカヌー競技のメッカとなっていることに絡み、他県から送迎の仕事をさせてもらっている。
- ・学校授業における食農教育支援（大豆の栽培から豆腐づくりまでの授業支援、地元農産物を使用した調理実習支援）
- ・人手不足解消について、農業、林業について。
- ・船舶航路の浚渫により、港湾機能の阻害要因を取り除き、魚介類等水生生物の生息環境の確保・漁場の資源管理を行い、海の環境を整えることにより、きれいで豊かな海の再生に取り組む。
- ・資源回復のための種苗放流事業、マガキ養殖業の中でもシングルシードマガキの生産、純兵庫県産アサリの種苗生産～出荷の確立。
- ・地力の弱い地方では、画期的、独創的なアイデアが求められる。市役所が一般企業等と連携して、地理的な特徴を生かしたプランを進めている。都市部の補完的な役割を果たすことで、地方の役割が明らかになり、政策手腕に係っている。
- ・何を企画しても参加が少ない、ボランティアも少ない、取り組み例が思い浮かばない。
- ・市と連携して毎月1日・15日を啓発活動強化日として会員が通学路や交通が集中する交差点などでの立ち番活動を実施している。